

## ワークショップ形式による研修の要件と事例

### 1. 災害廃棄物処理に必要な能力の習得方法

災害廃棄物処理に必要な能力は、大きく分けて平時の業務を通して習得できる能力と、研修やシンポジウムといった特定の場で習得できる能力の2種類がある。前者としては、地元の地理・環境への理解や、他部署及び関係機関との人脈構築、現場経験を通じた実務的知識・心構えの習得等が挙げられる。これらはいずれも研修やセミナーで培うことは難しく、平時の業務の中で各自が意識的に身に付けるべきものである。一方、後者は特定の場に関係者が集うことで効率的、体系的に習得することが可能な能力であり、計画的に実施することで、知見の伝承や関係者のモチベーション向上等が期待される。

能力や情報を得る特定の場としては、研修やセミナー、シンポジウム等が挙げられる。そのうち研修については、講師の話を聞きながら体系的に知識を学ぶ座学・講義形式、参加者自らが主体的に与えられた作業をこなす演習・ワークショップ形式、実際に現場や施設に赴く視察・体験形式等が代表的な形式として挙げられる。また、平時の業務の中でも実施できる形式としては、必要な知識を各個人がパソコン等を使って習得するeラーニングがある。それぞれの形式に適するテーマや期待できる学習効果が異なるため、研修を実施する際には、その研修を通して参加者に何を身に付けて欲しいのか、十分に検討したうえで設計することが重要である。

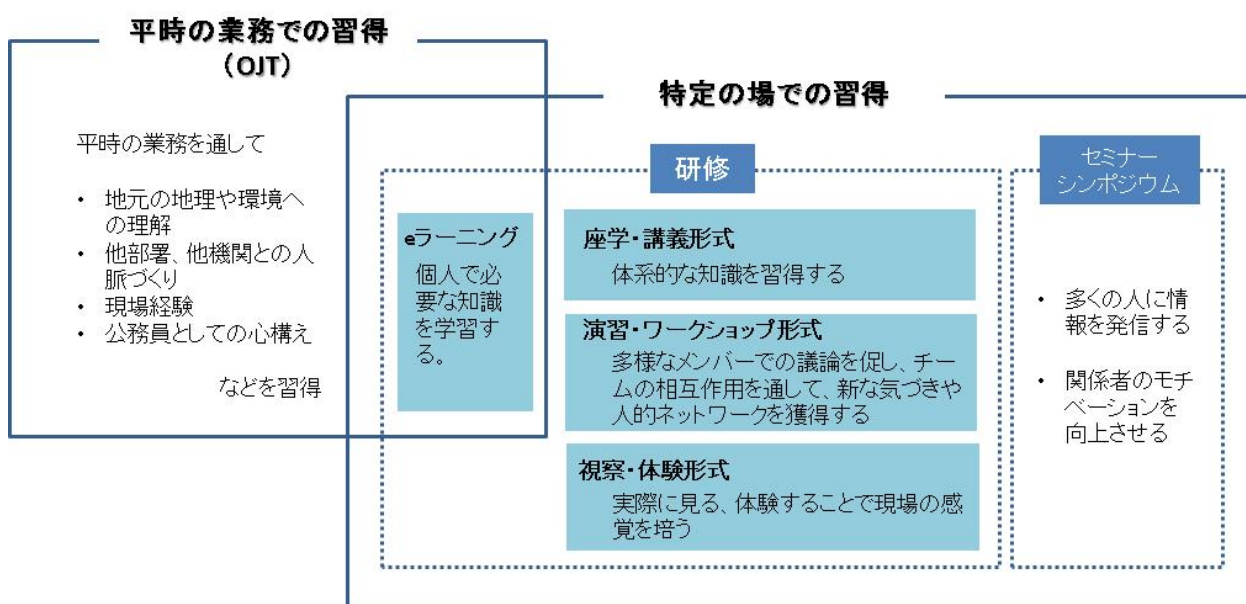


図 災害廃棄物処理に必要な能力の習得方法例

### 2. ワークショップ形式での研修の要件

扱うテーマや参加者に習得させたい能力によって、様々な研修の手法が考案されているが、このうちワークショップ形式での研修は、多様なメンバーが主体的に参加し、チームの相互作用を通じて新しい

創造と学習を生み出す効果が期待できるとされている。災害廃棄物の処理においては、様々な関係主体と協力しながら刻々と変化する事態に対応しなければならないため、知識の習得を中心とした座学・講義形式の研修だけでなく、参加者が他のメンバーと協働しながら与えられた目標を達成する演習・ワークショップ形式の研修も組み込むことが望ましい。

ワークショップ形式での研修で期待できる効果、適用可能と思われるテーマ例、及び実施に必要な要件を以下に示す。

#### ■ 期待される効果

- ✓ 参加者自らが頭と体を使って主体的に取り組むことができる。
- ✓ 普段の業務で十分にコミュニケーションがとれないメンバー（他部署、他機関等）と意見を交わすことができる。
- ✓ 個人の意見が出しやすく、効率的且つ網羅的に意見や情報を収集・整理できる。
- ✓ 個人や特定の所属組織だけでは得られない、多角的な意見や情報を得ることができる。
- ✓ グループでの共同作業を通してコミュニケーション能力（人の話を聞く、自分の意見を分かりやすく伝える等）を培うことができる。
- ✓ ワorkshop実施後も活用できる人的ネットワークを作ることができる。

#### ■ 適用可能と思われるテーマ例

- ✓ 災害発生時に起きるであろう課題の抽出・整理
- ✓ 災害発生後の時系列に応じた各部局の役割、業務の抽出・整理
- ✓ 災害発生後の空き地利用（時系列、目的別、利用主体ごとに整理）
- ✓ 災害発生後の組織内の人的配置

等

#### ■ 実施に必要な要件

##### ✓ 参加者とグルーピング

普段の業務であまりコミュニケーションがとれていないメンバーや、異なる立場で業務を行っているメンバーに参加をお願いすると、ワークショップでの議論を通じた参加者の気づきや、新たな人的ネットワークの創造といった効果が期待できる。また、議論するグループの構成も、できる限り多様な意見が交わされるよう配慮することが望ましい。

##### ✓ ファシリテーター

参加者の数や扱うテーマによっては、グループ毎にファシリテーターを設けたほうが、議論が活発化する。ただし、ファシリテーターは自分の意見を強く主張したり、グループの議論を誘導したりしないよう、注意が必要である。

##### ✓ 時間

参加者の人数とテーマの内容を考慮し、全員が意見を出し切れるだけの十分な時間を確保す

る必要がある。また、多様なメンバーを集めるためには、早い段階でのスケジュール調整が望ましい。

✓ 議論の設計

参加者が議論を進めやすいよう、ワークショップで行う議論の流れを予め十分に設計することが重要である。ワークショップの最終目標、議論の流れ、各作業の手順については、ワークショップを開始する際に、しっかりと参加者に伝えることが望ましい。

✓ ルールと雰囲気づくり

議論を行うメンバー構成や扱うテーマによっては、参加者が発言を躊躇したり、他メンバーの意見と衝突したりする可能性がある。議論しやすい雰囲気を作り出すためには、事務局が参加者に予め「肩書等を気にせず一個人として発言すること」、「相手を非難しないこと」といったルールを周知する等、工夫が必要である。

### 3. ワークショップ形式での研修の事例

#### ■災害廃棄物処理の人材育成研修プログラム構築に向けたワークショップ

主催者：独立行政法人国立環境研究所（公益財団法人廃棄物・3R研究財団が受託）

参加者：東日本大震災の災害廃棄物処理を経験した自治体職員・民間事業者

災害廃棄物処理計画を作成中の自治体職員 合計26名

グルーピング：

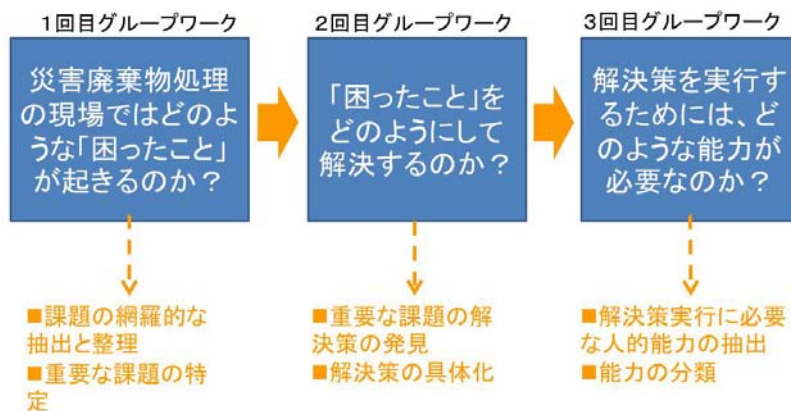
1 グループ6～7名で4グループを構成

各グループに1人ずつファシリテーター（国立環境研究所スタッフ）を配置

時間：1日半（1日目午後スタート、2日目夕方終了）

目的：災害廃棄物処理の研修でどのような能力を身につければ現場で活躍できる人材になるのかを明らかにする。

議論の流れ：



当日の様子：



会場の様子



グループでの議論の様子



グループワークの成果物例